『夢の欠片が割れる国』

作者　淺羽　一

ある所に、老人と子供だけしかいない国がありました。
老人は皆、曲がった腰を辛そうに支えながら虚しさと溜息ばかりを吐いていました。
子供は子供で、一番大きい子でも十四歳くらいまでしかおらず、いつも下らないことで騒ぎ合っては楽しそうに日々を過ごしていました。
ただ、両者はとても仲が悪く、決してお互いを認め合おうとしませんでした。
老人は子供達を見て、「あいつらはいつまで経っても成長しないガキばかりだ」と、憎らしげに頬を歪めて言いました。
子供は老人達を見て、「あんな風にだけは年を取りたくないんだ」と、冷たい笑みを浮かべて嘲りました。
幸いだったのは、その国がとても豊かで恵まれていたことでした。
高い所へ上る時もその国では、自身の足を使うことなく立っているだけで移動出来ました。重たい荷物を運ぶ時もその国では、ただ箱に入れるだけで好きな場所まで運んでくれました。
だけどその国で暮らす人々は、そんな技術が進歩すればするほど、一体何の為にそれらを開発したのか、理由を説明することが出来なくなっていました。
そんな中、とても珍しいことですが、ごく稀にその国でも美しい男性や女性が現れることがありました。彼らは皆、とても真っ直ぐな瞳をして、時に笑い、時に泣きながら、懸命に己の道を歩いていました。
ある子供は彼らへと羨望の眼差しを向け、しかしそのあまりの眩しさに思わず視線を逸らしてしまいました。
またある老人は彼らを見て暗い嫉妬の炎を燃やしながら、不幸を願う呪いの言葉を吐き出しました。
この国で不思議だったことは、歳の取り方が普通の国とは違うということでした。
この国では必ずしも、小さい子供から一つずつ年齢を重ねて、やがて年老いていくというわけではありませんでした。
例えば、ある少年はたった一月で老人の様に腰が曲がり、また、ある老人はほんの些細な言葉をきっかけにとても幼い少年へと姿を変えました。
そうして、徐々に老人はその数を増やし、子供達はより一層幼い歳になっていきました。
そんなある日、一人の青年が人々の前に現れました。
彼は思いました。「老人達は体を伸ばし、再び真っ直ぐに前を見てゆっくりとでも確実に歩き出すことが出来るはずだ」。
そして彼はこうも思いました。「子供達はその瞳に映す未来を信じ、それに向かって今の場所から最初の一歩を踏み出すことが出来るはずだ」。
青年は本当に心からそう信じていました。
だから彼は人々の前に立ち大声で言いました。
「皆さん。今の自分達の姿を、もう一度ちゃんと見つめて下さい。そして思い出して下さい。何より、信じて下さい。皆さんが本当にその目に映したかった、自分自身の姿のことを」
けれど、それを聞いていた老人と子供は、口々の青年を罵りました。
「お前に何が分かるんだっ」

「あんたに何が分かるんだっ」
皮肉な話ですが、普段は決してお互いを認め合おうとしない両者が、その青年を批判することで初めて、全く同じ意見を口にしたのです。
青年は悲しみました。
ですが、それでも彼は諦めませんでした。なぜなら彼は老人達も子供達も関係なく、みんなをとても大切に想っていたからです。
そこで青年はある研究に没頭し始めました。それは、人々に自分達の本当の姿を見せてやり、失ってしまった夢を取り戻させてあげる為の研究でした。
研究は決して簡単には進みませんでした。
青年は何度も何度も挫折を繰り返しながら、それでもそこから学んだことを少しずつ次の実験へと活かしていきました。
やがて遂に、彼はある眼鏡を発明しました。それは、それを掛けた人が自らの真の姿を思い出して、それを目にすることが出来るというものでした。
青年は歓喜し、すぐさまその眼鏡を大量に作って国中の人々へと配りました。
彼は信じていました。人々の目に映るものが、きっと彼ら自身が本当に夢見ていた姿であると。
でも、それは間違いでした。
青年は一つだけ失敗を犯していたのです。
眼鏡を掛けた人間が見たものは、彼ら自身の「本当の姿」でした。
それは確かに、彼らの「本当の夢」を思い出させることに成功しましたが、同時に彼らへあまりに厳しい現実も突きつけてしまったのです。
ある老人は鏡に映ったまだ二十歳くらいの疲れ果てた自分と目が合い、思わず悲鳴を上げて腰を抜かしてしまいました。それは体こそ若々しいものの、あまりにも年老いた眼差しを浮かべていて、老人はその異様な真実に恐怖してしまったのでした。
ある子供は鏡に映ったもう四十歳を越えている己の姿を見て、思わず鏡を叩き割っていました。そこにいたのは何も考えていなさそうにヘラヘラと笑うだけの、自らが大嫌いな大人の姿だったからです。自分はいつの間にこれ程までに年を取っていたのか、子供はその現実にもう取り戻せない時間の重さと、とてつもなく大きな絶望を感じていました。
そうして彼らはまた、自分達の周囲にいた人々の本当の姿も目にしました。ある老人は、本当はそれ以上に年老いていました。ある子供は、やはり本当の姿も同じく子供でした。その他にも、体は若いのにずっと老人として生きていた人や、もうすでに老人だったのにいつまで経っても幼い子供のままでしかいられなかった人、数多くの真実の姿が人々の前に晒されてしまいました。
彼らの中に、己の本当の姿を真っ直ぐに見つめ返せる者はほとんどいませんでした。
そして人々は叫びました。
「現実を悟り、何もかもに諦めを抱き、ただ静かに暮らしていた日々を返せっ」
「変わらない日々に笑い、下らないことで騒ぎ合い、面白可笑しく暮らしていられた毎日を返せっ」
眼鏡の発明家である青年は困惑しました。彼には最初から、人々の真の姿が見えていたからです。

「どうして怒っているんですか。皆さんは自分達の夢を思い出したのでしょう?」
しかしその青年の疑問は、それ自体が彼らの怒りの理由でもありました。
彼らは夢を諦めたり、夢に挫折した自分を誤魔化すために、そんな自身を守る為に、本当の姿を忘れていたのでした。それなのに、青年はそんな彼らに再び現実を思い出させてしまったのです。
青年は「夢は必ず叶う」と信じていました。だからいつでも真っ直ぐに前だけを向いて歩き続けられていました。
けれど、彼らはそんなに強い人間ばかりではありませんでした。だから悲しみや涙を忘れる為に、己の姿を偽っていました。
ですが、それはそんなに悪いことだったのでしょうか。自分達を守る為に仕方なくそうしている人だっていたのですから。それなのに青年のしたことによって、彼らは前に歩き出すどころか、その場での動きすら止めてしまったのです。
青年はその時になって初めて後悔しました。自分の考えは間違いだったと、心の底から自らの行為を愚かしいと嘆きました。
ただし、決して全ての人が青年を恨んでいたわけではありませんでした。中には、自分の姿に気付き、青年が望んだ様に再び夢を取り戻して足を踏み出した人もいました。
だけど、もう青年の目にそんな彼らの姿は届いていませんでした。そして人々の怒りを一身に浴びせられた青年は、遂に自らの「夢」を完全に否定してしまいました。
その瞬間、彼が作った眼鏡のレンズが音を立てて一斉に割れました。
幸いにして、人々に怪我はありませんでした。
しかし、つい先ほどまでその場にいたはずの青年の姿はもう何処にも見つけられませんでした。彼が老人になったのか、それとも子供になったのか、真相は誰にも分かりませんでした。
再び国は以前と同じく、老人と子供だけの国になりました。
彼らは今日もまた、お決まりの時間を送っていきます。
時折、人々の足下からガラスの割れる音が聞こえていましたが、もう誰も気にしてなどいませんでした。いえ、もしかすると、彼らはあの眼鏡の存在さえすでに忘れてしまったのかも知れません。
そうして、その不思議な国では今日も、小さく乾いた音が誰にも気付かれぬまま静かに消えていくのでした。

〈了〉